GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2010 Number 1

東京外国語大学

GLOBE Voice

2010 Number 1

東京外国語大学は創立110周年余りを迎え、広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉をあわせた造語です。言葉を入り口に社会とつながり、世界へと広がっていく。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。世界はグローバル化に向かって加速しています。「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。それが、東京外国語大学の使命です。

Contents

言葉でつなぐ世界の絆 ──3

History of TUFS ──7

学長対談 ──8
フジテレビ前社長 本学理事 村上光一

graduated active person in society ──14
ピアノ・アーティスト 谷真人
外務事務官 吉村祐子

person doing research ──16
酒井啓子／柳原孝敦／星泉

コラム「聴」──22

歴史を刻む在学生 ──26

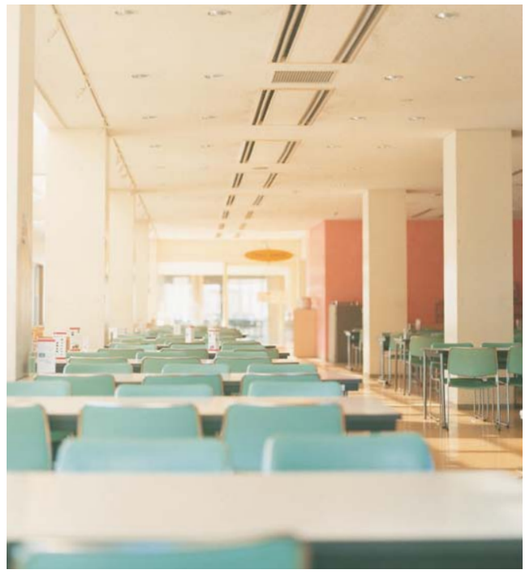
News ──28

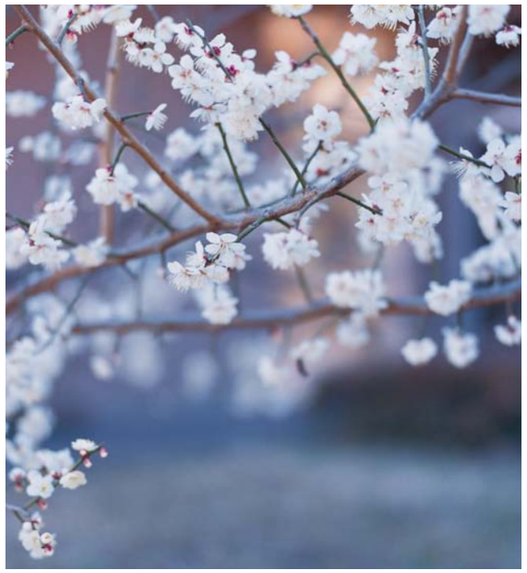
写真・市橋織江

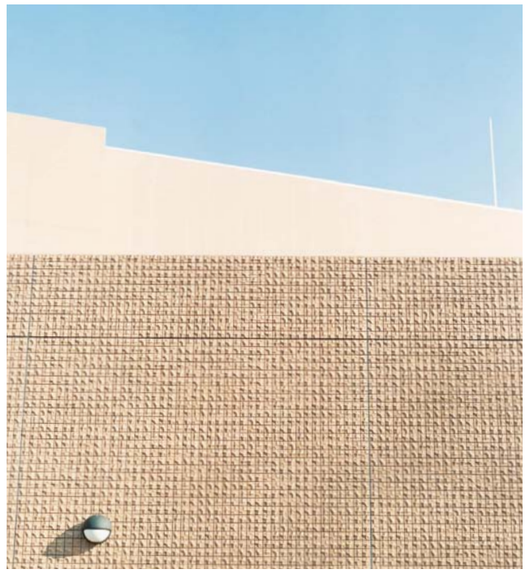
言葉でつなぐ世界の絆

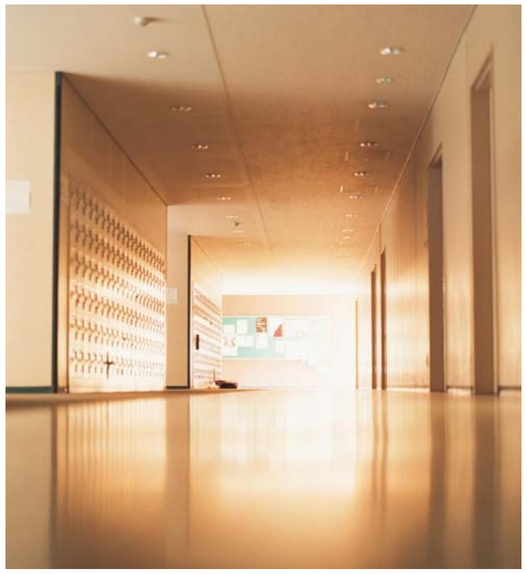
言葉に秘められた果てしないパワーは独創的な柔らかい空気感を漂わす。「ヒト」「心」「文化」「社会」「地球」、そして「時代」といった側面を映し出す鏡があるのだとしたら、ある種、言葉の持つ力やその響きが一端を担っているのかもしれない。人はあらゆる場面で「ことば」に頼る。世界と対話し、社会をつなぐ。東京外国語大学は言語で地球をデザインし、国際社会をリードする拠点としてさらなるステージへと駆け上がる。

Tokyo University of Foreign Studies









知を究め 世界と対話する

「21世紀の地球社会と対話し行動する」をテーマに新たな時代へと疾走する外語大は、5つのミッションを掲げている。「地球社会化時代における教育研究の拠点大学」をビジョンに据え、「拠点大学化」「国内外の大学連携等による教育研究の高度化推進」「社会に開かれた大学づくり」「キャンパスライフの充実」「拠点大学としての基礎整備」を実践する。本拠地であるキャンパスを北区西ヶ原から現在の府中市に移転して約10年、新たな知的空間を創出し、国際化、グローバル化の最前線に立つ。

外語大の精神が深く刻まれシンボルでもある校章は、1899年に制定された(裏表紙参照)。中央の炬火と両脇の羽翼を組み合わせた意匠で、炬火には「L」の文字が巻きつく。炬火は世を照らし、「L」はラテン語の「Lingua(言語)」の意味が込められる。8組の羽翼は、当時設けられた英・仏・独・

露・伊・西・清・韓の8学科を表現している。

グローバル化が加速する現代社会で、外語大が掲げる教育理念は明確だ。地域、国、そして地球へとつながる社会との協働に、言語が果たす役割は大きい。社会で通用する語学力を育み、言語を通じて〝世界への夢〟を広げる。「対話と交流」をキーワードに、知の創造と蓄積で真の国際人を目指す。

新たな拠点となる「アゴラ・グローバル」は、2010年春に完成した。プロメテウスをブランド・イメージとする外語大の知性そのものを表しており、国際的なセンスを磨き、世界との関係を普遍的に広げる。このグランドデザインを導きの星として、さらに邁進する。

府中市のもっとも東に位置し、調布市との市境に面するキャンパス、ここに国際性あふれるアカデミックゾーンがいままさに展開されているのである。▼

時代とともに

History of TUFS

外語大の源流に触れる

外語大の源流は、江戸幕府によって1857年に開校した蕃書調所とされる。以来、その足跡は、まさに日本における外国研究の歴史といっても過言ではない。

東京外国語学校と改称され8学科を有したキャンパスは当初、東京・神田錦町に位置していた。だが、火災や地震、戦災などによって何度も移転を余儀なくされ、1940年以後は、主に北区西ヶ原の校舎を利用した時代へと落ち着いていった。

第二次世界大戦後の1949年、外語大は新制大学として生まれ変わった。そして2000年、東京西部に位置する府中市の現キャンパスに移り、近代的な設備と高度な情報環境のもとでの教育・研究を実現した。

外語大は21世紀の日本における国際的研究、学術交流の拠点の一つとして重要な役割を果たし続け、未来へと続く道を歩む。▼

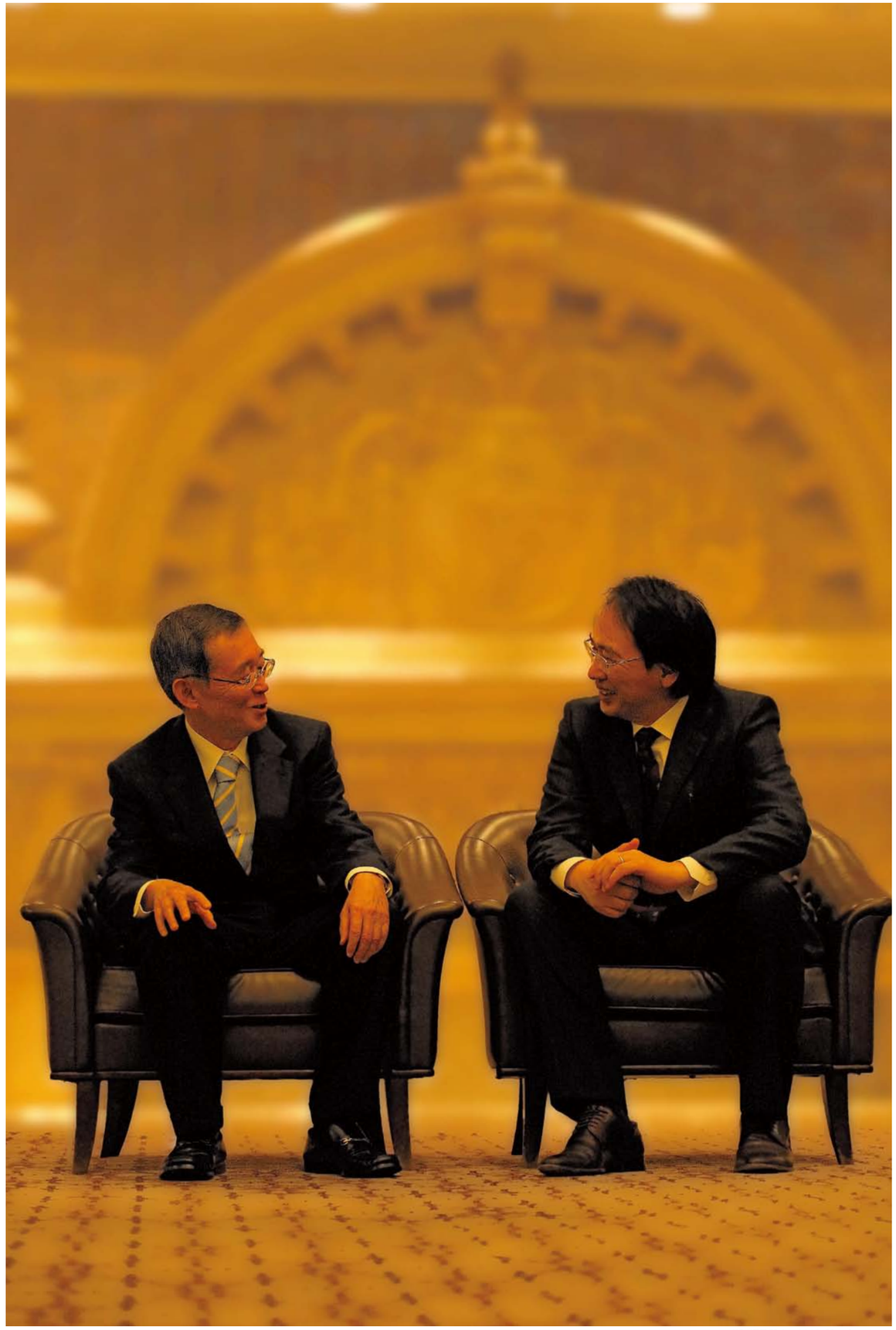
1875年
草創期に教鞭を執っていた
外国人教員の面々。
フランスやドイツなど、外語大ならではの
国際色豊かな人材がすでに揃っていた。

1947年
当時の語劇祭のポスター。
その思いは現在まで受け継がれている。

1956年
卒業記念アルバムにも登場した
外語大名物「健ちゃん食堂」。
カレーライスや天丼、
牛めしなどのメニューが並ぶ。

創立80周年を記念し、東京外語会から
寄贈された大時計文字盤。
ギリシア神話にのっとり、苦難に耐える
強靭な意思の力と理想追求のシンボルとして、
現在の府中キャンパスでも
存在感を示している。

1958年
1958年に完成した
西ヶ原キャンパス正門正面の校舎。
2000年の府中キャンパス移転まで、
多くの表情を捉えてきた。



学長
亀山郁夫対談

世界26カ国の言語教育を展開し、
かつ日本屈指の地域研究拠点でもある
外語大は、国際政治の世界をはじめ、
産業界やマスコミ、文壇、
研究界などこれまで数多くの
著名人を輩出してきた。
国立大学の法人化から約6年、
今後さらに飛躍するためには何が必要なのか。
第1回の学長対談は、財務担当理事に
就任していただいた本学OBの
村上光一・フジテレビ前社長がゲスト。
ライブドアの買収騒動では社長として
手腕を発揮した同氏に、
外語大への思いをうかがった。

村上光一 氏

フジテレビ前社長
本学理事

フジテレビの社是は「半歩先に」大学全体でそのムードを

文・小玉進午　写真・高仲建次

亀山郁夫学長（以下 学長） 日本を代表する企業のトップとしての経験を持つ村上さんですが、まずは外語大に入学されたきっかけからお聞かせいただけますか。

村上光一（以下 村上） 外語大は、昔は国立大学の二期校でした。私は一期校の受験に失敗しまして、浪人を覚悟していたのです。そこへ外語大スペイン科合格の知らせが来た。そのときの選択肢は二つです。浪人して一期校を再度目指すか、外語大に入学して大好きな映画を心置きなく見る生活を送るか。私は迷うことなく、後者を選びました（笑）。

正直にいうと、スペイン語がどうしても学びたかったというわけではありませんでした。当時、「中南米貿易はこれから伸びる」と盛んにいわれており、外語大も産学協調路線といいますか、企業で活躍できる人材を育成しようという明快なコンセプトがあったのです。しかし私は英米語やフランス語ではないところがいいな、という理由で受けたにすぎず、まさしく「何となく入った」といえます。学長がドストエフスキーに対する強い思いからロシア語に進んだのとは大きな違いです（笑）。

学長 今回、本学の財務理事に就任していただいたわけですが、外語大を取り巻く環境をどのようにご覧になっていますか。

村上　現在、外語大は大きな曲り角、過度期にあります。国立大学法人としてもうすぐ約6年になりますが、さまざまな問題点が出ています。また、外部環境としても大学自体がサバイバル競争の真っ只中にいるといえるでしょう。私自身は子どもがいなかったこともあり、45年以上、教育に直接関わってこなかったのですが、新たに目を開かれた気持ちで良い体験をさせてもらっています。

　先ほど、外語大には「何となく入学した」と申しましたが、社会人になってから、そのことをすごく後悔したのです。今も若い連中にいうのですが、大学では明確に目的を持たないとダメだと。理事をお引き受けしたのは、私自身が明確な目的もないまま卒業してしまったことを贖罪するいい機会だと思ったからです。

物事を進める頑固さは必要 わがままをどう通すか

学長　村上さんのお顔を拝見していると、思わず笑みがこぼれてしまいます。天性の力ですね。フジテレビのトップに上り詰める中で、何か秀でた資質みたいなものをご自身で感じてらっしゃいましたか。

「私が常々学生たちにいっていることは、『最高最良の言語の媒介者を担え』です」―亀山

村上　常務や専務、社長と上がる段階で部下からよくいわれた言葉は、「ものすごくわがままな人」です(笑)。どこでも同じかもしれませんが、「わがままをどう通すか」。大事な部分ですかね。

　テレビ局というのは、共同作業で番組やソフトを作っていくわけで、1人で仕事は成り立ちません。だけど一方で、頑固でないと物事は進まない。ただ協調しているだけではダメなのです。私の場合、わがままをみんなが通してくれた。学長のいう資質があるのだとしたら、唯一わがままを通すときに愛嬌があったというところじゃないですか(笑)。

学長　私が常々学生にいっていることは、最高最良の言語の媒介者を担えと。媒介者である以上は他者の言葉をしっかり聞き取り、咀嚼した上できちんと伝達する。没個性と感じるかもしれませんが、他者の言語を伝える中にも、「個性的な発信」があるのではないか、そういう役割を外語大の学生たちが自ら考えることが言語を学ぶ基本的なイメージとなればいいと思います。

　村上さんは大学時代、言語の勉強はしたものの、孤独に過ごしていたのかな、という印象があります。ひとりで生きることに自覚的だったのでしょうか。

村上　ひとりっ子で、しかも父親は私が3歳のときに出征しました。終戦も台湾の台北で迎え、母親と2人で父親の故郷である九州に引き揚げたのです。そういう意味では自立していたでしょう。それに寝る前は必ず父親の写真に、「お父様、おやすみなさい」といって着物をきちんとたたむような良い子でした。大きく変わったのは社会に出てからです。フジテレビという、とんでもない企業に入って、まさに「もまれた」わけです。

学長　一種のカルチャーショックみたいなものですか。

村上　入社して、映画部という海外の映画番組を購入する部署に配属になりました。ディズニーやワーナーといった企業のトップと下手な英語で交渉するわけですが、そういう役が回ってきたのは私が外語大卒だったからかもしれません。

　その後、編成に変わったのですが、私を編成に引っ張ったのはいわゆる〝鬼軍曹〟と呼ばれていた人物。編成は視聴者の好みに合う番組を企画してそれを最も相応しい時間帯に放送することを考える部署で、当時フジテレビは全部の番組を4人の編成担当者で考えていました。

　ある日、番組の企画を急きょ変更する必要が生じて、4人全員が企画書を作り私が全員の企画書をその鬼軍曹の自宅に届けたのです。企画書を見た鬼軍曹は「村上、お前のがなってない！」と怒鳴り、そのままタクシーに私を乗せ、誰もいない日曜日の会社の会議室に連れて行った。そこで書き直しを命じられたのですが、横で見張っているので全然書けない。夕方になって「これから俺が一字一句言うから口述しろ」と。それから夜中の2時頃まで、鬼軍曹はつき合ってくれました。企画書の書き方のイロハを叩き込まれたのは、そのときです。私はそういう人に鍛えられ、人生が大きくガラリと変わったのです。

会社がまとまるには トップが皆を安心させ 自信を持たせること

学長　その後、制作部門から離れて管理という仕事に入っていくわけですね。ライブドアの件などさまざまな問題もありました。

「〝鬼軍曹〟に鍛えられて、これまでの人生がガラリと大きく変わりました」―村上

村上　はっきりいって、あれは企業が存続するかしないかといった話でした。それまでテレビ局の経営者というのは、どうやってスポンサーから広告収入を持って来て、どう視聴率の高い番組を作り出したらいいかを考えるのが仕事の柱でした。基本的に国に守られていて、外資が入ってこないように資本上のバリアが作られていたわけです。

　ところが、例の(当時のライブドア社長の)堀江君はテレビ局も上場している以上、完全に資本の論理にさらされるというところを切り込んできた。

　今は大学もサバイバル競争の中にいますよね。テレビ局と似ているところが非常にあるなと思うのは、大学もカリキュラムや教育システムといったソフトが重要となる。それと大学全体が持っているムードというのかな。会社でもムードが盛り上がっているかどうかで力が全然違います。ライブドアのときには社員が一つにまとまっていた。トップがみんなを安心させて自信を持たせる事が非常に必要だということは、あのとき一番学んだところです。

学長　村上さんとお話する中で、いかにブランド力が大切かということを感じます。生き延びるためには数字では見えないオンリーワンといいますか、ある種のオーラが必要という気がします。

村上　今まさに、外語大は明快に顔を作らなければいけない時期だと思います。学長はメディアに露出してブランドイメージを作り出すことに積極的に取り組んでおられますが、例えば、中東イスラムに関して外語大の存在意義は大きい。そういうところがもっと広がればいい。

学長　話は変わりますが、私の夢は大学教育の中に音楽を取り入れることなのです。音楽の大事さを外語大だからこそ持ちたい、そういう夢を抱いています。

　基本的に外語大というのは言語的な脳の育成に、集中的に取り組んでいるわけですよね。それに対して非言語的な脳の育成もやらないと非常にひ弱な、何かやせ

細った人間ができてしまう気がして仕方がない。右脳というべきなんでしょうか、さまざまな形で非言語的な体験を積むことが逆に言語的な能力をさらに活性化し、なおかつ豊かに肉付けしていくものだと考えています。

典型的な一つの例として、私自身が取り組んだ『カラマーゾフの兄弟』。この小説を翻訳しながら感じたのは、小説から受ける働きかけです。すごく強い感動を味わうことができて、その感動をただ単に言語的な体験だけでなく、音楽的に経験している部分がある。音楽は喜怒哀楽といったものを原始的に集約しているところがあって、音楽的なイメージにより言語的な経験を肉付けする部分があると私は考えているのです。言語を教える大学だからこそ、非言語的なものの教育を重視していかなければならない。そういうときに理想的なのがオペラです。オペラは言語的なものと結びつきが強く、世界の古今の教養、あるいは古典というものを詰め込んだジャンルですから。例えば、「世界のオペラ」のような授業を作るとか、自由にコンサートを聴く空間を作るなどして、先生方が好きな音楽経験を語り継いでいく……。

「言語を教える外語大だからこそ
大学の教育の中に
音楽を取り入れたい。
理想はオペラです」—亀山

村上　昨年、母校の高校の学園祭に行った際、2年生は全員ノルマとしてクラス単位でミュージカルをやらされていました。私は「ウエストサイドストーリー」のクラスを見たのですが、ものすごく感動しました。我々の時代だったら考えられませんが、女子も男子も全員が実に楽しそうに歌って踊っている。

お互いに協調して一つのものを作り上げる。音楽は良い情操教育だと思います。オペラは必ず言語が必要ですし、いい視点ではないでしょうか。

モーツァルトが好き ピアノコンチェルトを聴くと安眠できる(笑)

学長　モーツァルトがかなりお好きだと聞きました。

村上　やはり聴いていて気持ちがいい。喜びの中に影があり、優しい。ピアノコンチェルトを聴くと安眠できる(笑)。

オペラだと、「コシ・ファン・トゥッテ」など実に現代的です。ちょっとしたことで人の気持ちなんか簡単に移ろうものじゃないかという話ですからね。モーツァルトは人の世の感情を引きずり出すことに長けています。

学長　音楽として聴くと、テキストとは別な経験を受けることがあります。一生に残る音楽体験というものはありますか。

村上　僕は30歳のときに初めて外国に行ったのです。それがドイツ。なかなか贅沢なツアーでね。バイロイト、ザルツブルク、ミュンヘンなど、とにかく音楽祭巡りの1カ月という内容でした。実は会社をさぼって行ったのです。それが私の音楽体験(笑)。

学長　それはすごい冒険をされましたね。会社に迷惑がかかるとの思いは(笑)。

村上　思わない、わがままだから(笑)。休暇届も分けて出しました。上司の目をくらますためにね。一度に出したら20日以上になるわけだから絶対ハンコを押してくれません。だから1週間ごとに分けて出しました。でもね、帰国したらものすごく怒られて、査定も最低でした。

学長　一生に残る経験です。

村上　「パルジファル」を見たのですが、そのときたまたま舞台に上からすごい音で吊り具が落ちてきた。幸い怪我はありませんでしたが、そのハプニングも含めて音楽は人間の内面をえぐり出せるんだなと思い、またハマっちゃった。

学長　私がいいたいのはまさにそれです。音楽の経験に言葉がのるとそれが倍増する。音楽の経験があれば、例えばドストエフスキーを読んでいて、そのときある旋律が浮かんだのなら経験が倍増します。それこそが生きる喜びそのものじゃないでしょうか。

ところで村上さんは、大学入学のいきさつもさることながら、映画にも並々ならぬ情熱をお持ちのようですね。お薦め映画を挙げていただけますか。

村上　まず「第三の男」。ああいうスタイリッシュな映画が好きです。それと僕は基本的に叙情派だから「ローマの休日」ですかね。もう一つはアラン・ドロンとリノ・ヴァンチュラの「冒険者たち」かな。あと余談になりますが、大学2年のとき突然日本映画に目覚めたのです。名画座で黒澤明監督の「生きる」を見たとき、砂地に水が浸み込むように心から感動したのを覚えています。

学長　すばらしい体験ですね。では最後に外語大の話に戻らせてください。かつて外語大は、一期校に落ちたときの選択肢の一つという時代が長く続きました。ですが、その時代ははるか昔に終わり、外的なイメージも大きく変化しています。グローバル時代の現在、存在価値を示すにはどうあるべきか、またどのような人材を育てるべきとお考えですか。

村上　今の外語大はグローバルな視点を持った、まさに国際人を育てる先兵という印象があります。それは広い意味で国際人であればいいわけで、ジャーナリストでもいいし、文化教養人だっていい。外交の場であの人がいたということでもいいわけです。企業人に限定する必要は全然ありません。

先生たちも、どんどんマスコミで外語大の先生というイメージを広げてほしいと思います。そうやって今の在校生、それを教える教授たち両方が一体となって大学を活性化し、OBたちの顔もできるだけ見えるようにしていかないといけない。そのためにはやはりキャンパスが元気でないとダメじゃないでしょうか。

学長　キャンパスが元気になるにはどうすべきでしょう。

村上　学園祭というイベントはあるとしても、例えば春と夏と秋に何かしようじゃないかと学長が旗を振ったらいかがでしょう。それをみんなで盛り上げていく。そうしたことでキャンパスを元気にしていくのです。フジテレビの社是は、「元気で、若々しく、半歩先に」です。そういうムードで半歩先を来た。大学も半歩先を行く姿勢を打ち出せばいいと思います。

学長　貴重なお話をありがとうございました。▼

「互いに協調して
一つのものを作り上げる。
音楽は良い情操教育だと
思います」—村上

かめやま いくお
1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものには『ドストエフスキー 父殺しの文学』、翻訳『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』ほか。

むらかみ こういち
1940年生まれ。フジテレビ顧問。東京外国語大学理事。62年同大学スペイン科卒業後、フジテレビに入社。編成、制作畑を歩み91年取締役。2001年代表取締役社長、07年相談役。09年から本学財務担当理事。

graduated active person in society_01

“ピアノ・アーティスト”という世界を求めて。

谷 真人

ピアノ・アーティスト

「音楽をジャンルで分けるのが嫌い。いいと思うものにジャンルは関係ない。表現方法も、こうあるべきと決めつける必要はない」

各界に多くの著名人を輩出している外語大でも、プロの音楽家はそういうものではない。イタリア語学科出身の谷さんは、自らをピアニストではなく、「ピアノ・アーティスト」と呼び、異色の輝きを放つ。

ステージでは真っ青のジャケットを身にまとい、前半と後半でピアノの向きを180度変えるなど工夫を凝らす。

自らデザインしたコンサートのプログラムには、「音楽って、もっと自由でいいと思う」と記す。全12曲中、オリジナルが7曲、弾き語りが2曲。これにラフマニノフ、ドビュッシーなどのクラシックの名曲が並ぶ。

「いよいよ最後の曲です」「イヤだ!」。観客とのやり取りに会場が沸く。曲の間のトークも洒脱で軽妙、客席から笑い声がもれる。

「イタリア映画とイタリア料理が大好きだったから」という理由でイタリア語学科に入学した。

「今となればイタリア語を話す機会がなくほとんど覚えていませんが、4年間、アカデミックな環境の中で『学ぶことのロマン』を味わえたという意味では充実した時間でした」

卒業後は外資系の広告会社に入社した。幼少期に習ったピアノははるか昔の記憶として、外語大時代も触れることはなかった。

入社4年目、仕事の達成感が見いだせず、ストレスを溜めていた。「ショパンの生まれ故郷を見たい」とポーランドを旅した。それをきっかけに15年ぶりにピアノと向き合った。

98年に転職したが、職場の人間関係がうまくいかず会社を去った。

「初めてハローワークに行った日のことが忘れられません。世の中の現実を知りました」

心身ともにボロボロになったがピアノは続けた。無職になって1年後、パリのコンクールで優勝した。

「『朗らかな音』って評されたことがあります。日本の音楽教育をきちんと受けていたら出せなかった音なのかも知れません」

曲想をCGで映像化するなど、ピアノ・アーティストとして素直な感性を音で表現している。▼

たに まさと
1987年東京外国語大学外国語学部イタリア語学科卒業後、外資系広告会社に入社。幼少時に2年半ピアノを習い、27歳のときに15年ぶりに独学でピアノを再開。98年に退社後、2000年に応募したパリ国際アマチュア・ピアノ・コンクールで優勝し、01年プロデビュー。静岡県出身。
http://www.masatotani.jp/

graduated active person in society_02

広い視野を持つことを学んだ学生時代。

吉村祐子

外務省 外務事務官

「語学ができることと通訳ができることはまったく別の話です。とにかく実践して実績を積むしかありません」

外務省に入省して12年目の吉村さんは、鳩山首相をはじめ、歴代要人のイタリア語通訳をこれまで幾度となく務めている。首脳会談など外交問題に発展する可能性もあるだけに、緊張の連続だが、「失敗することで打たれ強くなりました」。

現在、2009年8月に総合外交政策局政策企画室に設置されたばかりの「政策スピーチ・ユニット」に所属する。首相や外相らの演説原稿を作る専門チームで、吉村さんはその初代メンバーに抜擢された。

「一番気を遣うのは人物分析です。例えば大臣がスピーチされる場合、就任してからのご発言や政治家になったときの志などをくみ取って原稿を書きます。そのために、人物像が必要なのです。一方で、スピーチのテーマは今の日本外交にとっての優先課題が多いため、役立つ知識を蓄積できます」

外語大では、「マイナーではなく、かといってメジャーでもない言語を学びたい」と、イタリア語を専攻した。外交官の仕事を意識し始めたのは、3年生で国際法のゼミを取ってから。

「とにかく(西立野園子)先生の授業がとても面白かった。それにイタリア語漬けの1、2年次と違い、さまざまな語学専攻の人に会えて視野が広がったともきっかけです。海外に興味があるのはもちろんのこと、言語学であれ国際事情であれ、自分の将来構想をしっかり持った人が周りに多数いました」

イタリア語を専攻したことが結果的にその後の進路を決めることになる。道は自然と外務省への就職にしぼられていった。

外交官試験は、2度目の挑戦でおよそ13倍の難関を突破し、専門職として入省した。2年間、イタリアで在外研修などを受けた後、ローマの日本大使館に3年間勤務した。

「イタリアではお釣りをごまかされ、泣かされたこともありました」

苦い思い出も経験したが、「外務省は女性の活躍の場が多くやりがいがある」と、吉村さんは素敵な笑顔をのぞかせる。▼

よしむら ゆうこ
1998年東京外国語大学外国語学部イタリア語専攻卒業。99年に外務省入省。西欧第1課、儀典官室などを経て2000年より2年間のイタリア研修の後、02年からローマの日本大使館に3年間勤務。05年帰国後、西欧課配属。09年8月より現職。岐阜県出身。

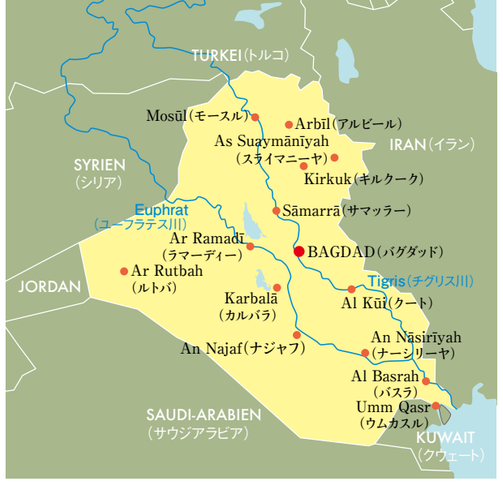
person doing research

1

イラク研究の第一人者、新たなフィールドへ

Interview with Keiko Sakai

イラク研究の第一人者として名高い酒井啓子氏の代表作『フセイン・イラク政権の支配構造』（岩波書店）を読んだことがあるだろうか。世俗近代主義的な当時のイラクのフセイン政権が徐々に変容をとげていく姿を具体的に描いている。戦争の影響で欧米の研究者がイラク国内に入国すらできない状況のもと、現地の新聞や雑誌、書籍など、一次資料の収集に努めながら研究を続けた成果は、イラクの政治エリートの出自を多面的に分析することにつながるなど、重層的なイラク政治システムを明らかにした。欧米の研究にはなかったその視点は、国際的にも高い評価を受け、イラク研究のみならず、途上国の権威主義体制国家を分析する上で多くの研究者の参考資料となっている。



「イラクなら空いている」の一言から

今でこそ、イラク研究といえば真っ先に酒井氏の名前が上がり、先駆者として切り開いてきたが、意外なことに自発的に選んだ研究テーマではないことはあまり知られていない。大学時代、取り組んだ卒論テーマはレバノンの宗派や内戦だった。1982年に大学を卒業すると、日本最大のアジア・アフリカ地域研究機関であるアジア経済研究所に入る。ちょうど国境を巡って80年に勃発したイラン・イラク戦争の真っ只中だった。

「大卒女性の就職が厳しい時代でした。就職したアジア経済研究所は、当時では珍しく女性の研究者も採用する職場。上司から『イラクなら空いている』と言われたのです。イラン・イラク戦争の影響で、イラクの研究者が必要となったのです」

80年代の日本といえば、イラク研究者は皆無に等しかった。当時の国際情勢を鑑みると、研究テーマとしてのイラクは決して主役とはいえない時代である。研究者がいなかったのも当然といえば当然だった。

手探りで研究に取り組み、試行錯誤を繰り返す。そんな日々に転機が訪れたのは、86年のことである。3年間、在イラク日本大使館専門調査員としてバグダッドに赴任することになった。それまでイラク研究といえば欧米が中心で、宗派や民族・部族をはっきりと線引きして捉えがちにあった。日本と違い、宗派や民族が複雑に絡み合うからこそ、実は融通無碍な考えが通用する。必然的に現地の人とのコミュニケーションに迫られたことで、そのことを実感した3年間だった。

状況に応じて〝名刺〟を使い分け

象徴的なエピソードがある。

「初めて会う人にあいさつする場合、彼らは損得を考えるのです。例えば、シーア派だと名乗ったほうが得ならそう自己紹介し、逆なら『バスラの出身です』などとぼやかす。よく出る話題に『ウチの本家はどこで』『どことどこが縁戚でつながっていて』みたいなものがあり、社会の根底が垣間見えるのです」

見ず知らずのアラブ人には、まず宗派や出自は明かさない。出身の部族名を言うかどうかで悩む。相手が敵対関係の部族出身の可能性があるためだ。生きていく上で、一人ひとりが常に政治の中に身を置く緊張感に包まれている。肌で感じた事実を丁寧に積み上げていった。より重層的なアイデンティティーを持ち、状況に応じて一番効果的な〝名刺〟を使い分ける。そうしたダイナミズムの中で駆け引きをしながら生活している社会だと気づき、イラク研究は大きく前進した。

90年代に入り、国際情勢を語る上でイラクは欠かせない存在となっていた。湾岸戦争やイラク戦争、そして米国によるイラク占領と、絶えず中心に位置していた。酒井氏の研究テーマが脚光を浴びた瞬間でもあった。

紛争地域の学生を留学生に

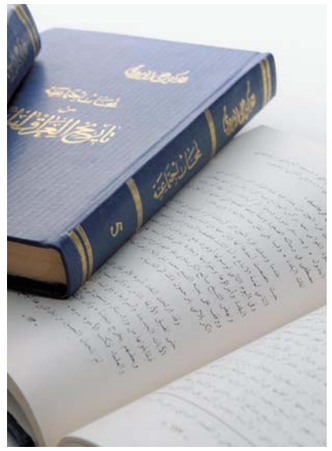
教育者としての酒井氏は現在、先端的な試みに取り組んでいる。

「一般の学生を対象にしたゼミや講義も受け持っていますが、同時に留学生を対象にした講座があります。平和構築・紛争予防専修コース（Peace and Conflict Studies、略してPCS）といい、イラクやアフガニスタン、東チモール、カンボジアといった主に紛争地域の学生を留学生として招き入れ、彼らに英語で授業するのです。毎年8人から9人を受け入れて、2年間の修士課程を履修してもらっています」

例年2人ほど博士課程に進み、日本が持つ紛争解決・復興のノウハウを直接伝えられる貴重な機会となっている。内容もそうだが、英語で授業を行う点も外語大らしく、他大学とは一線を画す試みである。

「母国で高等教育を受けているのですが、紛争でまともに英語の勉強ができず、なかには20年前の教科書を使っていた学生もいます。そんな生徒には、ぜひいろいろなことを学んでほしい」

中東への理解を広めたい一心で、研究から教育へとフィールドを広げた。次なる〝歴史〟を刻み始めている。▼



政治色が強く発売禁止になっていた『イラクの社会史』（全6巻）。調査員としてイラクに赴任していた87年当時、本屋を駆けずり回って出会った幻の一冊。

上：イラクの伝統料理、マスグーフ。チグリス川で取れる鯉を炭火で焼き上げたもので、もてなし料理の定番。
下：旧約聖書に出てくる「ノアの箱舟に天から降ってきたお菓子」と信じられている『ミナ・サマー』。北イラク名産として知られている。

授業の後に意見交換する教え子たち（留学生）。

■イラク攻撃後の主要な政治プロセス

2003	5月／ブッシュ大統領の「主要な戦闘終了」宣言、米英軍中心の占領開始 8月／CPAの補佐として、イラク統治評議会成立
2004	3月／統治評議会、国家基本法制定 6月／イラク暫定政権が発足（アッラーウィ政権）
2005	1月／制憲議会選挙（最初の複数政党制に基づく選挙） 5月／移行政府成立（ジャアファリ政権） 10月／新憲法制定の国民投票 12月／新憲法のもとでの正式議会（連邦議会）選挙
2006	5月／正式政権成立（マーリキー政権）
2009	6月／米軍、イラク住宅地域からの撤退を完了

文・小玉進午　写真・高仲建次

さかい けいこ
1982年東京大学教養学部卒業、英国ダーラム大学にて修士号を取得。アジア経済研究所研究員、在イラク日本大使館専門調査員などを経て現職。主な研究テーマは、イラクを中心とした中東現代政治。著書に『イラクとアメリカ』（岩波書店）『イラクは食べる』（同）など。

酒井啓子 教授
大学院総合国際学研究院・先端研究部門

武力衝突やテロなど、今もなおイラク情勢は混沌としている。国際社会から途絶し生命の危機にさらされるイラク国民を見るにつけ、「学問の無力さをひしひしと感じる」と語る。研究者として25年、今は教育者として平和構築への模索を懸命に続ける。その姿勢を貫く信念とは何か。「まずは相手の話を聞くこと」。答えは簡潔にして明快だった。

person doing research

2

書かれたものはすべて文学、文化史的な視点で

Interview with Takaatsu Yanaghara

メキシコ、グアダラハラ市のオスピシオ・カバーニャスの壁画。お気に入りのスペースの一つ。

やなぎはら たかあつ
1989年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業後、同大学院修士課程修了。メキシコ国立自治大学文献学研究所客員研究員、法政大学助教授などを経て、2004年から現職。博士（文学）。

柳原孝敦 准教授

大学院総合国際学研究院・言語文化部門

ガルシア＝マルケスをはじめ、ラテンアメリカ文学は世界に冠たる地位を占める。「ラテンアメリカは政治的には敗北したが、文学的には勝利した」と評される所以だろう。だが本来読み解くべきものは、別次元にある。彼ら作家たちがその時代状況の中で出くわさざるを得なかった政治潮流、そしてそのネットワークの強靭さだった。

文・小玉進午　写真・山崎亜沙子

文献学者である柳原孝敦氏の研究スタイルの特徴は、まさにその視点にある。

「従来のように文学の解釈に汲々とするのではなく、作家を有機的な知識人として捉え、広く文化史的な視点から見たいのです。書かれたものはすべて文学ですし、映画、音楽、ポピュラー文化を論じることも厭いません」

レイエスの業績との運命的出会い

著書『ラテンアメリカ主義のレトリック』（2007年刊）は、博士論文を加筆、修正したものだが、そこに辿り着くまでの経緯は、必然的な出会いによる産物と呼ぶに相応しい。その端緒は91年にまでさかのぼる。メキシコ政府交換留学生として渡墨した柳原氏は、そこでメキシコの外交官であると同時に〝近代メキシコ国民文学の父〟とも呼ばれた作家、アルフォンソ・レイエス（1889-1959）の業績と運命的な出会いを果たす。

「漠然と何か新しいことをやりたいと思っていたところでした。毎日のように古文書館に通いつめ、レイエスの貴重な資料を見つけたのです。論文には、そこから発掘した多くの記述を引用させてもらっています」

吹き抜けのサロン風閲覧室と壁一面の蔵書に囲まれた空間は、とても心地よかった。柳原氏が28歳のときだった。

この著書の最大の特徴は〝ラテンアメリカ主義〟と呼ぶ以外にない言説の存在を仮定し、言説がどのように形成し変形されていったのか、そのプロセスを追っているところにある。そのためには、政治的対立や複数の言説の集合離散を時代の大きなダイナミズムの中で捉える必要があった。そこから見えてくるものは、レイエスの批判理論の明晰さとその存在の特異さである。

「レイエスはそれまで考えられていた以上に〝ラテンアメリカ主義〟という言説の流れに意識的であり、19世紀末以後のモダニズムの流れの中では際立った存在です」

研究では、未刊の手紙など膨大な資料収集とその精読が不可欠だった。19世紀の初版本や復刻雑誌なども読みあさり、「発見する楽しみ」に心を躍らせた。柳原氏の専攻はあくまでもスペイン語圏の文学・思想・文化論だが、「文献学者」を自認する原点はここで発芽したといっていい。

スペイン語を選択した理由

そもそも柳原氏が外語大でスペイン語を選択したのには、大学入試に失敗し絶望していた時期に遭遇した世界史的な出来事の影響が大きかった。ガルシア＝マルケスのノーベル文学賞受賞やフォークランド紛争（共に82年）など、ラテンアメリカにおける一連の出来事である。

文献学に傾斜していった柳原氏は、学生に向けた小論文の中でこう説いている。

〈『百年の孤独』を論じるためには『百年の孤独』を一冊だけ手元に置けばいいというわけではありません。書物には「版」というものがあります。初版と第2版では内容が異なっている場合があります。事実、『百年の孤独』には旧版と新訳版、さらに『ガルシア＝マルケス全小説』叢書版という3つの日本語訳が存在するのです。だから、本格的に『百年の孤独』論を書く場合には、可能な限りすべての版を揃えなければなりません〉（柳原孝敦、『論文・レポートの書き方』より）

右：アルフォンソ・レイエス全集（全26巻）。貴重な記述が眠る。
左：カルペンティエールの活動を伝える雑誌記事を探し手書きで綴った。

疑問は放置せず、辞書を引くなどして徹底的に調べて曖昧さを省く。学生にはそういう姿勢を身につけてほしいと訴える。

「私企業に行きたくなくて大学院へいったようなもの」と振り返るが、大学教員として現在があるのは、研究の醍醐味を知ったから。

研究者を目指したきっかけ

実は大学教員として自覚を強めたのも研究がきっかけである。

『ラテンアメリカ主義のレトリック』の中でも触れているが、柳原氏はレイエスよりほぼ一世代前のホセ・エンリケ・ロドー（ウルグアイ、1872-1917）の作品『アリエル』にも注目した。ある大学教員が学生たちに最後の講義をするという内容なのだが、「美を感じることの大切さ」「功利主義や民主主義の成果としてのアメリカ称揚と批判」「イスパノアメリカの美徳の称揚」など全6章から成り、「アリエル主義」として当時のラテンアメリカ圏の文学や政治に大きな影響を与えた。各地で大学教育の場をめぐる論争が巻き起こり、人文科学教育の制度化が図られた経緯がある。「教師の声」で聴衆に向かって語りかける姿勢の面白さに気づき、教職をより自覚していった。

「19世紀末のラテンアメリカの文学者はジャーナリストであり、政治活動家でした。研究を通して僕は人文教育の存在理由がわかり、その結果、研究者になりたいという意識が芽生えたのです」

柳原氏のもう一つの主要研究テーマに、アレホ・カルペンティエール（キューバ、1904-1980）がある。ラジオやテレビの番組制作やイベント企画、映画・音楽評論などを手がけていたカルペンティエールは、1928年にフランスに亡命後、作家活動を始める。母国には、キューバ革命後の59年に帰国した。以後、文化活動の大御所的存在となり、キューバでは彼の名を冠した文学賞まである。日本でも出版物は多く、柳原氏は『春の祭典』（1978）を翻訳している。

現在は、ロベルト・ボラーニョ（メキシコ、1953-2003）の『野生の探偵たち』（2010年4月刊行予定）の翻訳に取り組む。この英訳本は、米ニューヨークタイムス紙の「2007年・今年の10冊」に選ばれており、99年にはラテンアメリカの若手作家の登竜門といえるロムロ・ガジェゴス賞を受賞した。ボラーニョが2億人とも3億人ともいわれる全スペイン語圏に知られる小説家となった記念作品である。

「たった一つの作品しか残していない20世紀前半の前衛詩人の足跡を追う70年代の若き詩人たちをめぐる奇妙な探偵小説です。かなりの読解力が求められます」

こうした多角的な読解力こそ、柳原氏の真骨頂なのである。V

メキシコ、西インド諸島以南の北・中央アメリカ、南アメリカの国や地域を指すラテン・アメリカ。スペイン語あるいはポルトガル語を公用語とする。

person doing research

3

チベット語の多様な変遷を描く

Interview with Izumi Hoshi

星泉 准教授

アジア・アフリカ言語文化研究所　言語動態ユニット

チベット人は、仏像を指し示すとき
必ず4本の指をそろえ、手のひらを上に向ける。
そんな美しい所作を持つ穏やかな人びとである。
一方でメディアでは現代政治に
翻弄される姿も流れる。
「ものの見方はいろいろあるのです」。
現代と古代のチベットを行き交い、
アジア・アフリカ文化の広報担当として
世界の多様性を見つめる。

文・小玉進午　写真・高仲建次

言語がいかにして今ある姿にたどり着いたのか。現代のチベット語と古いチベット語の両方を相手に、嬉々として異文化に立ち向かう星泉氏の妥協しない探究心が研究を支える。

現地に飛び込み、実際にそこに住む人たちと生活をともにする。対面調査だけでは気づきにくい言葉を一つひとつ丁寧に調査した。

そうした研究の集大成が『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』（2003年刊）となり実を結ぶ。「約1000語の基本動詞の用例をまとめました。これまでの辞書にはなかったチベット語の動詞表現の豊かさを描けたと自負しています」

1964年、アジア・アフリカ言語文化研究所が外語大に附置された。全国共同利用研究所の一つで、星氏は「プロジェクト研究部・言語動態研究ユニット」に所属している。実証的研究を基盤とした言語記述の方法論および言語の多様性に関する根幹的な研究を目指す組織である。

住民と生活をともにし、動詞の用例まとめる

調査はフィールドワークが基本だ。研究員が当該地域に赴き、現地の人びとに協力してもらい、徹底的に聞き取り調査を行う。行き先はシベリア、北米先住民地域、東南アジアなどさまざまで、「これは何ですか」と目、耳、鼻など体の部位を指しては単語を聞き取ることから始める。そしてその音韻を解析し、さらに複雑な構文へと進み、最終的に文法としてまとめる。並行して民話なども収集し、テキストにまとめて世界の共有財産としていく。

チベット語は比較的研究が進んでいたので、星氏はもう少しつっこんだ研究に取り組んだ。例えば「これは○○です」と答える際の「です」にあたる動詞の用法だ。

英語・仏語などでは、『私』『彼』などの人称によって使い方が決まっているが、チベット語では、「I am」「He is」が「I is」「He am」になる場合がある。

調べてみると、自分に注目させて話す場合は、「彼」のことでも「あなた」のことでも1人称の形を取り、一方で客観的に突き放して話すときは自分の話でも3人称を使う傾向にあった。さらに見ていくと、話し手は動詞を使い分けて場をコントロールしていたのである。

「こうした違いは1対1の対面調査だけではなかなかわかりません。言語の話されている現場に飛び込んで『気づかれていないパターン』を見つけるしかありませんでした」

インド北部のラジプールという山麓の村に暮らすチベット人一家に受け入れてもらい、一緒に生活する中で、彼らの話すチベット語を身につけることを始めた。

女性と子どもが大勢いるにぎやかな家族で、話題は近所の噂話から自慢話、恋の話、結婚生活の話、愚痴、文革時代の苦労話まで広がる。誰がどんな話をするときにその形を使うのか。そのときの表情や口調はどうか。内容はどうだったか。話し手個人は普段どんな考えを持っているか。それが今この発言にどのように反映しているのか。緻密で克明なデータを収集し、その結果を前述の『現代チベット語動詞辞典』にまとめた。

インドのチベット文化圏、ラダック地方にて。
夏祭りの際の記念写真。
ラダック語とチベット語はよく似た言葉である。

文献調査で動詞の特殊な活用例を探究

2人の幼児の母親でもある星氏は現在、文献調査を主体に進めている。フィールドワークは調査が始まると長期にわたるため、現状では難しいからだ。

「話し手による動詞活用の特殊な運用例は現代チベット語の姿であり、今調査中の14世紀に書かれた『チベット王統記』といった重要な歴史書には、こうした用法の違いはないのです。ではこの使い分けはいつどのような事情で始まったのか。人間の根源的な欲求と関係があるのかもしれません」

チベット文学の翻訳にも意欲的に取り組み、若手研究者とチベット文学研究会を立ち上げ、トゥンドゥプゲという作家の作品を文芸誌『火鍋子』に連載している。文革の時代に苦しんだチベットの人びとの姿をこれまでにない手法で描き出した「チベットの若者に多大な影響を与え、どの本屋を探しても小説集だけがない」という人気のものだ。

こうした業績が評価され、星氏は06年、学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞した。

「これを機に仲間のフィールドワーカーとともにその研究成果をもっとアピールしたくなりました」

広報誌発行し、フィールドワーカーの活動紹介

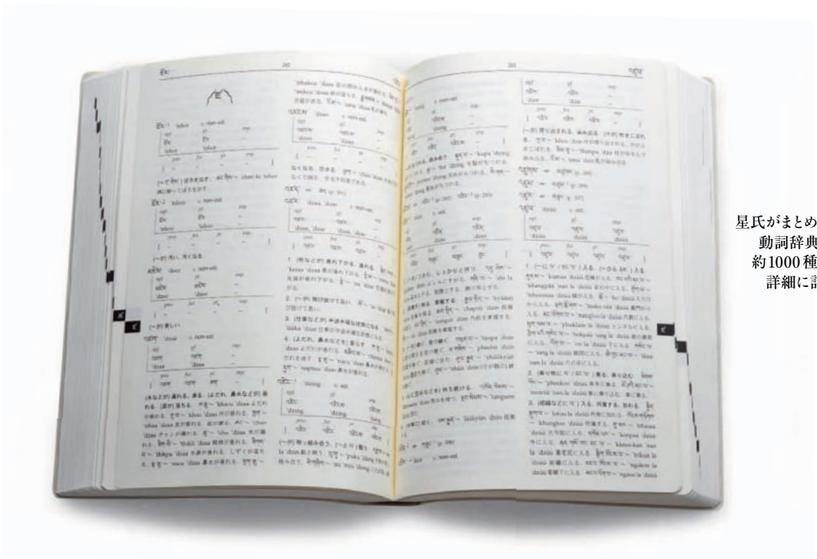
日本の学術機関にフィールドワーカーは多くいるものの、これまで交流は綿密とは言い難かった。そこで所属機関の枠を超えた交流の機会を持つべく、研究所では、記述言語学の研究者を結ぶ「Fieldling」や、文理の枠を超えたフィールドワーカーを結ぶ「Fieldnet」というコミュニティーを立ち上げている。さまざまな研究会やワークショップを行うとともに広報活動にも力を入れる。そうした活動の一環で発行しているのが、星氏が編集長を務める広報誌『フィールドプラス』である。

広報誌『フィールドプラス』。
世界各地のフィールドで
行われている研究活動の
紹介を目的としている。

「一般の方たちに広くフィールドワーカーの仕事をわかってもらうのが狙いで、誌面は写真を多用したビジュアル重視の内容です」

創刊号の特集テーマは「〝シングル〟で生きる」。世界のさまざまな地域の「おひとりさま」事情をフィールドワーカーの調査を元に特集し、ケニアの代理夫制度など「世界は広い」と思わずうなる内容が満載となっている。「お金を出してもほしい」という声もあり評判は上々で、3号目からは500円で一般向けに販売が開始されている。

実は星氏の母親も外語大でチベット語を教えていた。チベット語研究の道に入ったのは、そういったことが大きく影響している。「将来はまたフィールドワークに戻りたい」と熱意を語った。▼



星氏がまとめた『現代チベット語
動詞辞典（ラサ方言）』。
約1000種の動詞の意味を
詳細に記述している。

ほし いずみ
1991年東京大学文学部言語学科卒業、97年同大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。トヨタ財団研究助成（研究代表者）。2006年学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。博士（文学）［東京大学］。

「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。

イラスト・ミヤギ ユカリ

GLOBE Voice Column KIKU

1. 詩人の声音がつつむ空気の絵柄

副学長
大学院総合国際学研究院 先端研究部門 教授
和田忠彦
Text : Tadahiko Wada

日ごろ親しんでいる作品を、それを書いた本人はどんな声で、どんな調子で読んで聴かせるのか――こわいもの見たさという心持ちも少なからずあって、いわゆる朗読会のような催しに時どき出かけてみる。イタリア文学に関わるものなら、たいていは、目に留まるたびに手に入れてはいる。なかには、ひょんな偶然から知り合って、文字を見ただけで声音が分かる作者も仕事柄もちろんいて、それはそれで、親しみをおぼえるだけでなく、読むときの妨げというか、煩わしさにもなる。

けれど絵を14点じぶんで選んで、それにことばを添えるなどという、なんとも大胆な「びじゅつのゆうえんち」を一冊つくった詩人が、実際どんな声音でそれを読んで聴かせるのかは、やはり聴いてみたかった。6000年前サハラ砂漠の岩山に遺された壁画、古代ローマのモザイクから北宋の水墨画にボッスもゴヤもと、20世紀にいたる古今東西の絵画が描きとった『くうきのかお』に、ことばの輪郭があたえられ、見通しの利く風景がひろがっていく。たとえば熊谷守一1935年作の「揚羽蝶」には、こんなことばが添えられる。

〈チョウが　はねを　うごかすと／くうきも
いっしょに　うごく。／くうきの　うごきと　いっしょに／チョウのしょっかくは　ふるえる。／きみが　いま／すいこんだ　くうきの　なかにも／いつかの　アゲハチョウの　はばたきが／はいっていた　かもしれない。〉

ほんとうなら保存のきかない《空気》を絵がつつみこむ。その《空気》のなかには、画家が呼吸していた《時間》も閉じこめられていて、それで《空気》には顔が、表情が刻まれているらしい。おなじ時間を呼吸したものすべてをつつむ《空気》ともなれば、そのひろがりは地球規模にとどまらない。それに絵の描かれた過去の一時点にもとどまらない――だから時空間を超えて、いまのわたしたちにも「空気の顔」が絵の中に見える。そう詩人アーサー・ビナードは、のびやかに、そしてなつかしげに、唄う。

その声を、武蔵野の郊外にある画廊の、きっと40人も入ればいっぱいの部屋で聴いたことがある。よしもとばななの翻訳者で、最近日本語で小説も出したイタリアの知人が話す日本語に、とてもよく似ていた。

気づくと、どこにもない抑揚をもつ詩人の声音に、ことばの背後にあつめた《空気》(の感情)の伽藍が突き崩されて、あたらしい眼で絵を、《空気》(の顔)をみつめる自分がいた。▼

わだ ただひこ
1981年京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門はイタリア近現代文学・文化芸術論。著書に『ファシズム、そして』(水声社)、『声、意味ではなく―わたしの翻訳論』(平凡社)、『ヴェネツィア 水の夢』(筑摩書房)ほか。訳書に、デ＝アミーチス『クオーレ』(平凡社ライブラリー)、イタロ カルヴィーノ『魔法の庭』(ちくま文庫)、ロベルト ロンギ『イタリア絵画史』(共訳、筑摩書房)など多数。

2. 異国で聴く懐かしい街の音

大学院総合国際学研究院 先端研究部門 教授
新井政美
Text : Masami Arai

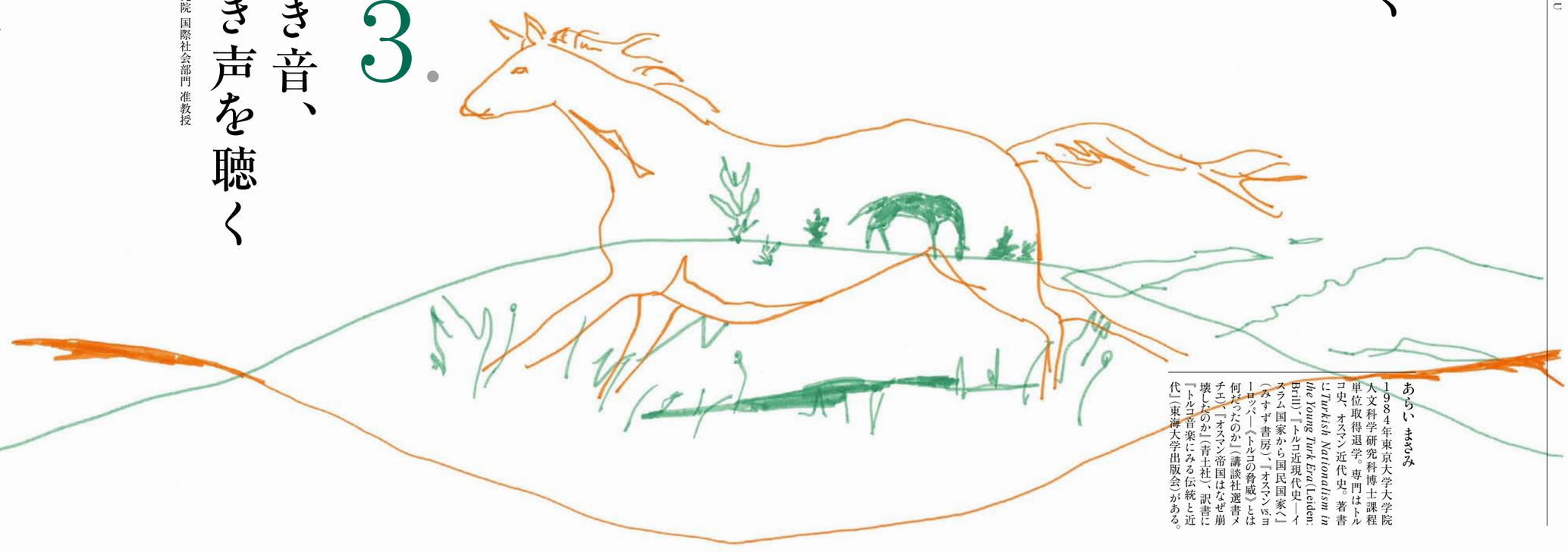
街の音、というものがあったと思う。金魚売りや唐茄子屋、黒板塀の奥から聞こえる三味線……。そこまでさかのぼらなくても、町工場の音や幼稚園からの声、市電のとよみや、それにゲートボールの喚声だって、その街らしさを醸す音だろう。ただそれらの音が、べったりと均質化されて久しいとは、よく言われるところだ。

しかしどんなに画一化が進んでも、街そのものが動かないように、変わりようがないその街の音、というものが、やはりあると思う。そのことを強く感じたのは、何年か前に北ギリシアの美しい港町、テッサロニキを訪れたときだった。僕はギリシア語を知らないので、文字までちがうこの国では、ほとんど宇宙人のような感覚を味わうことになる。それなのに、朝、ホテルを出て、僕は何やら親しみのある音に包まれたのだ。音楽？　夢の中に迷い込んだような気分で一瞬そう思った。ギリシア音楽はトルコとほとんど同じ響きやリズムをもっている。だから音楽かもしれない。でも、朝からそんな音を流している家なぞどこにもありはしない。なんだ一体？　戸惑いながら歩きだした僕は、やがて気づいた。

「おおい、ゆんべはあれからどうしたい？」「仕事の具合はどうだあ？」「坊主はちゃんと学校行ったか？」とでも言っているにちがいない、ちょっとガラガラした調子の会話が、通りをこえて街の人々の間を賑やかに行き交っていたのだ。大声でしゃべる声の、その質までが、僕の知っているトルコの人々と同じで、つまり相手の生活や心の中へ、ずかっと真っ直ぐに踏み込んでゆく会話、というか、要するに人との距離のとりかたが、明らかにトルコと同じなのだった。

ナショナリズムが、いかにギリシアをトルコから切り離し、西欧の仲間だと言い張っても、600年にわたってオスマン帝国のお膝元だったテッサロニキがトルコと同じ文化をもっているのは、考えてみればごく当たり前のことだった。やがて僕は、意味不明な言葉の渦の中、奇妙な懐かしさをいだいて、また歩きはじめた。▼

あらい まさみ
1984年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。専門はトルコ史、オスマン近代史。著書に*Turkish Nationalism in the Young Turk Era*(Leiden: Brill)、『トルコ近現代史―イスラム国家から国民国家へ』(みすず書房)、『オスマンvs.ヨーロッパ―〈トルコの脅威〉とは何だったのか』(講談社選書メチエ)、『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』(青土社)、訳書に『トルコ音楽にみる伝統と近代』(東海大学出版会)がある。



3. 音なき音、声なき声を聴く

大学院総合国際学研究院 国際社会部門 准教授
千葉敏之
Text : Toshiyuki Chiba

ローマからローカル線で約1時間、そこから日に数便の小型バスで15分ほどにあるアナーニの旧市街は、人影も疎らで閑散とした静寂の町であった。市門から続く隘路を進み、短い坂を登り切ると、あたりを一望する高台に、大聖堂の慎ましやかな堂宇と鐘楼が姿を現す。正面入口から堂内に入れば、窓から差し込む穏やかな日差しと、教会内の控え目な装飾が、心安らかな祈りの場にふさわしい空気を醸し出す。歩みが聖堂の中程に差しかかると、暗い地下へと続く小階段に行き当たった。階下にある地下祭室は、司教殉教者聖マグヌスに捧げられた至聖の空間で、闇と静謐の支配する場所なのだが、観光客用の照明によって突如照らし出された地下空間に聴こえたのは、音なき大音響、声なき大音声であった。

地下祭室の壁という壁は色鮮やかな壁画で埋め尽くされ、それらは複数の図像プログラムを構成する。中央の主祭室のアプシスに描かれているのは、中空に七色の光輪に囲まれて現れた小羊＝キリストを、四福音書記者を象徴する有翼の獅子、鷲、牛、天使が囲み、それを24名の長老たちが、楽器を携え、一斉に杯を掲げて凝視する様である。新約聖書のヨハネ黙示録にある「小羊の即位」をもとに構成されたフレスコ画だ。同じ祭室内に描かれた諸聖人の環状伝記との関係性を踏まえると、その制作意図は、聖人達の敬虔なる生涯こそが、間近に迫る終末時の救済に与るための模範的生たることを、聖堂に集う信者に示すことであったと考えられる。では、この壁画から聴こえたあの轟音は、一体何だったのだろう。

聖書の記述を「音量」という観点から評価すると、その最大値は、天が開く、神が現れる、神が語る、天使が語る際の音であって、それらは天変地異の轟音に譬えられる。耳を劈く轟きの描写で群を抜くのは、天上で繰り広げられる壮大な終末劇のビジョンを天使がヨハネに示す、黙示録である。聖ヨハネの前に現れた天使の声は「ラッパの響きのような大声」であり、天に出現した「人の子」の声は「大水の轟き」のごとく、バビロンの崩壊時には、稲妻と雷の轟きと落雷、また「地上に人間が生まれ出て以来、かつて起こったことのないような」大地震が起こる、とある。預言書としてのヨハネ黙示録は、光と闇、沈黙と轟きを対比的に用いつつ、世界終末という間近に迫る未曾有の事象を、迫真のリアリティをもって描き出す。典礼での朗誦を想定して書かれたと言われるその文体は、音声をも視覚化する、映像喚起的テクストでもあった。

大聖堂地下祭室の「小羊の即位」図は、緊迫感に満ちた視線のやり取りや、登場人物間の絶妙な間合いを通じて、終末劇の大音響を観察者の耳底に再生させる、いわば開閉器の役割を果たしていた。私があの時に聴いた音は、まさにパトモス島でヨハネが聴いた音だったのだ。▼

ちば としゆき
2004年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。専門はヨーロッパ中世史、歴史補助学、ドイツ史学史。中世において国境を越えて広域に展開する文化事象に関心を持つ。著書に、『中世の都市―史料の魅力、日本とヨーロッパ』(共編著、東京大学出版会 2009年)、『西洋中世学入門』(共著、東京大学出版会 2005年)、『信仰と他者』(共著、東京大学出版会 2006年)などがある。

Influential Face

歴史を刻む在学生

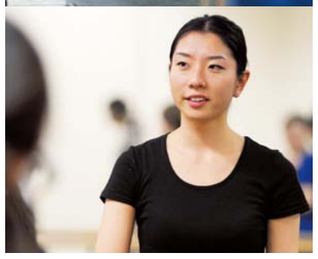
Text by
Shingo Kodama
Photo by
Kenji Takanaka

「フラメンコの媚びない感じが大好き」

藤本昌子

スペイン語専攻 3年

上：真剣なまなざしで練習に取り組む藤本さん。
指先の細かい動きにまで神経をとがらせる。
中：鏡越しに一つ一つの動きをチェック。
練習の成果は外語祭はもちろんのこと、リサイタルや
地域のイベントなどで披露する。
下：厳しい練習の合間には、表情をゆるめることも。



サークル棟地下の舞踊練習場では、毎週火曜と金曜の午後にリズムが乱舞する。強く、ときに激しく2拍子と3拍子が複雑に絡み合う。コンパスと呼ばれる独特のリズムは、人間の喜怒哀楽を生々しく表現する。

スペイン舞踊部は2010年に創部27年を迎えた。総勢82人の部員をまとめる藤本昌子さん（スペイン語専攻3年）にとって、09年の夏は忘れられない特別な季節だった。

フラメンコ留学をするため、本場のセビージャに単身渡った。19世紀ごろにジプシーが生み出したとされるフラメンコは、長年差別された彼らの悲しみや苦しみ、そして生きる喜びを表現し、深い人生哲学が込められている。本場でその原点を垣間見た。

「とにかくaireが違いました！」

Aire（アイレ）とは英語のairに相当するが、スペイン語ではフラメンコが持つ独特の雰囲気や空気感を表す言葉として用いられる。

「日本でプロの先生のレッスンを受け、多少形になっていると思っていたのですが……」

すべてが吹き飛んでしまうぐらい、本場の雰囲気はあまりに圧倒的だった。小さいころからフラメンコの空気感で育った現地の人との差を見せつけられた夏だった。

フラメンコとの出会いは新入生の春に見た先輩たちの演技だった。「しなやかで力強い踊りに感動しました」。10歳まで住んだアメリカでスペイン語を覚え、ラテン系の音楽も好んだ。フランス語のささやく感じでなく、メリハリがはっきりしたスペイン語をもっと勉強したくて外語大に入学した。

「背筋をまっ直ぐ！」「遅れてる！」

先輩たちの叱咤の声が響く。1年生が一斉に強烈なアクセントで床を踏み叩く。

「伝統的に1学年上の先輩がすぐ下の学年を指導するのが慣わしです。フラメンコの媚びない、真っ直ぐな感じが大好きです。将来は眉間にしわが寄るような暗い曲でソロを踊りたい」

今も目線の先にはスペインの暑い太陽が輝いている。■

Masako Fujimoto
10歳までの大半をアメリカで過ごし、
幼稚園でスペイン語に出会う。
2007年東京外国語大学入学、09年夏には本場・
スペインのセビージャにある
タージェル・フラメンコ学校の中級クラスに留学。
「将来は国際関係の仕事に就きたい」。広島県出身。

プロのダンサーも輩出した
由緒あるスペイン舞踊部。
先輩から後輩へ、
その伝統が受け継がれている。

News

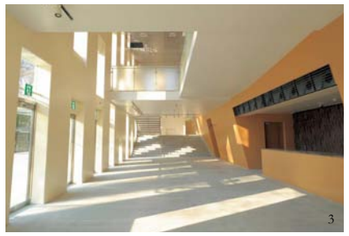
01

アゴラ・グローバルが完成 国際交流拠点として期待

2000年8月の府中キャンパス移転以来、本学にとって念願でありました異文化交流施設「アゴラ・グローバル」(地球の広場)が今春完成いたしました。地上3階建ての施設には、1階に501人収容できる「プロメテウス・ホール」を設置、3つの同時通訳ブースも備えています。

同施設は、武蔵野の自然環境を考慮しつつ、21世紀に相応しい開放的で潤いのある空間を演出し、異文化交流促進のための「グローバル・コミュニケーション・プラザ」を用意、2階、3階には多目的な「プロジェクト・スペース」を設けています。5月22日のホームカミングデイの日にオープニング・セレモニーを開催いたします。新たな情報発信の拠点として、ご活用ください。

1


3

2

4

1・2：昼と夜でまったく違う
表情を見せるアゴラ・グローバル。
3：受付とクロークを備えた
エントランスホール。
窓から入る光も演出の一つだ。
4：プロメテウス・ホール入り口。
奥にはギャラリースペースもある。

今春完成したアゴラ・グローバル。ギリシャ語と英語をかけ合わせた「地球の広場」を意味する造語は、時間と空間の交差点をイメージしている。オープンスペースやカフェも設け、教員や学生の情報発信の場、留学生とのコミュニケーションの場として活用できる。

02

「e-Alumni SNS」
ログイン画面(上)。
利用するには、先ず、
参加登録の
申し込みが必要。

e-Alumni SNSの運用開始

本学は2009年9月、インターネット上で在校生と卒業生が情報交換する場「e-Alumni SNS」の運用を始めました。卒業生同士の交流の場、在校生が留学や進路について卒業生から助言を得られる場を提供することがねらいです。東京外語会(本学同窓会)のご協力のもと、現在、20カ国以上に滞在する卒業生が登録しており、さまざまな情報交換が始まっています。

詳細は「e-アラムナイ協働による学生留学支援」のホームページをご参照ください。
http://www.tufs.ac.jp/blog/e_alumni/

03

外語大出版会がスタート 本学独自の研究成果を発信

東京外国語大学出版会は2009年3月から、待望の刊行を始めました。2008年10月の発足以来、言語、地域研究、人文学という本学の教育研究分野を踏まえ、国際性・学際性に富んだ企画や、社会的関心の高いテーマを扱うことを心がけています。

具体的には、❶一般向けのスリリングな教養書として位置づけられる叢書、❷すぐれた研究成果をまとめた学術書、❸豊かな教育実践から生まれた教科書を3本柱に据え、本学の特色である独自の研究成果を社会に向けて発信してまいります。

エディターシップを発揮して、選りすぐりの企画を出版物として年間4、5冊を刊行していきます。どうぞご期待ください。

1

2

3

4

1:『よくわかる逐次通訳』
ベルジュロ伊藤宏美　鵜田知佳子　内藤稔
B5判　定価2,940円(税込)
2:『直接法で教える日本語』
留学生日本語教育センター 指導書研究会編
B5判　定価3,360円(税込)
3:『中上健次と村上春樹 〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』
柴田勝二
四六判　定価2,625円(税込)
4:『身体としての書物』Pieria Books
今福龍太
四六判　定価1,680円(税込)

Next Stage
卒業生・修了生の主な進路

2009年度（2010年3月3日現在）

- 朝日新聞社
- あずさ監査法人
- IHI
- イオンクレジットサービス
- 石田大成社
- 伊藤忠商事
- INAX
- 茨城県庁
- エイチ・アイ・エス
- エーザイ
- 外務省
- 花王
- カタール航空会社
- 川崎重工業
- 京都大学大学院
- 共同通信社
- キリンビール
- 近畿日本ツーリスト
- 慶應義塾大学大学院
- 厚生労働省
- 国土交通省
- 埼玉県立高等学校
- サントリーホールディングス
- CSKサービスウェア
- JTBメディアリテーリング
- 塩野義製薬
- 清水建設
- ジャパンエナジー
- シャープ
- 集英社
- 住友商事
- 全日本空輸
- 大同生命保険
- 大日本印刷
- 大和証券
- 中日新聞社
- 帝国ホテル
- 電通
- 東京外国語大学大学院
- 東京海上日動火災保険
- 東京学芸大学大学院
- 東京国税局
- 東京税関
- 東京大学大学院
- 東京地下鉄
- 東京都庁
- 東京入国管理局
- 東芝
- 東レ
- トヨタ自動車
- ニッセイ同和損害保険
- 日本興亜損害保険
- 日本政策投資銀行
- 日本生命保険
- 日本赤十字社
- 日本通運
- 日本電気
- 日本放送協会
- 日本郵船
- パナソニック
- 半導体エネルギー研究所
- 東日本旅客鉄道
- 日立製作所
- 一橋大学大学院
- 富士通
- 富士フイルム
- 防衛省
- 法務省
- ブリヂストン
- 本田技研工業
- 毎日新聞社
- 丸紅
- 三井住友海上火災保険
- 三井住友銀行
- 三井物産
- ミズノ
- みずほ証券
- みずほフィナンシャルグループ
- 三菱商事
- 三菱電機
- 村田製作所
- 明治安田生命保険
- モスクワ国立大学
- 森・濱田松本法律事務所
- 文部科学省
- ヤクルト
- ヤマト運輸
- 郵船クルーズ
- ゆうちょ銀行
- ロッテ
- YKK
- 早稲田大学大学院

2008年度

- アンダーソン・毛利・友常法律事務所
- イデア・インスティテュート
- 伊藤忠商事
- エイチ・アイ・エス
- お茶の水女子大学
- 外務省
- キヤノン
- 警視庁
- シャープ
- スズキ
- 清華大学
- Z会
- 全日本空輸
- 双日
- ソニー・コンピュータエンタテインメント
- ソフトブレーン
- 中央大学
- 筑波大学付属駒場中学校・高等学校
- 電通
- 電力中央研究所
- 東京外国語大学大学院
- 東芝
- トヨタ自動車
- 西日本新聞社
- 日産自動車
- 日本海事協会
- 日本学術振興会
- 日本原子力研究開発機構
- 日本航空インターナショナル
- 日本国際教育支援協会
- 日本電気
- 日本放送協会
- ニューオータニ
- 日立製作所
- ベネッセコーポレーション
- 防衛省
- 本田技研工業
- 丸紅
- みずほ証券
- みずほフィナンシャルグループ
- 三井住友銀行
- 三井物産
- 三菱自動車工業
- 三菱商事
- 三菱東京UFJ銀行
- 読売新聞東京本社

50音順

News 04

お世話になりました
退任する先生たちからの「手紙」

小林二男
Tsugio Kobayashi
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（中国語）教授

私は中国革命に興味をもち中国語を始めました。当時は国交もなく、大学に入学した年には文化大革命が始まってしまいました。初めての訪中は文化大革命終結後のことです。

言語は集中してやらなければモノになりません。学生は締め付けられているという感じを持っているかもしれません。私自身についていえば外語大で教えなかったら、中国語の読解力は今ほどにならなかったと思います。学生には本当に感謝しています。学生からの反応というのは非常に大切で、教員にとってもそこが教えがいの一つなのです。

1976年に外語大に来た私は、現在いる教員スタッフの中では一番長いのではないでしょうか。改めて思うことは、言語は手段で、教育は人です。どういった人間を育てるのか、教員の役割は重要だと痛感しています。府中キャンパスの環境は素晴らしいのですが、もう少し飲み屋さんが多いとうれしいですね（笑）。

谷川道子
Michiko Tanigawa
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（ドイツ語）教授

40歳の誕生日に外語大からお話をいただいて、神様からのお告げかと覚悟しました（笑）。外語大のいいところは、何より言葉を入り口にして世界とつながれるところでしょうね。言葉と文化と歴史を三位一体で学んで、さまざまな時空に飛翔できる。私自身はドイツの演劇と表象文化が専門なのですが、研究でも教育でもその三位一体を満喫してきたというのが実感です。

この春にアゴラ・グローバルが完成しました。このホールは本学独自の「語劇」の活動が社会的に認知された証かなと自負しています（笑）。

府中キャンパスそのものも10年たって桜も根づき、大学らしくなってきました。学生さんには、何に関心があるのか、どう社会とつながっていきたいのかを頭に描いて勉強なさい、といいたいですね。4月からは自由人として演劇実践や、ドイツ文化の翻訳・研究に取り組めるのを楽しみにしています。

工藤 浩
Hiroshi Kudow
大学院総合国際学研究院
言語文化部門（日本語）教授

外語大には、日本語学科が初めて出来た翌年、私が39歳のときに着任しました。気がつけば、それから24年間です。大学時代には教師から「町の学者になれ」といわれたのですが、国立国語研究所にもぐりこむことが出来、12年間お世話になりました。

外語大に来た当初は、学生の中に55歳以上の方が2、3人いました。つまり定年退職後に入って来る学生がいたりして、年齢的に平均化されていなかった時代ですね。当時はこちらが昼ごはんの時間をとれないくらいに質問攻めにされていました。教え子には、東南アジアの国の文相級や大学教授など、それぞれの国で一線で活躍している人も大勢います。

研究テーマは「日本語の副詞（かざし）」と「日本語のモダリティ」です。副詞を作り直せば、近代文法を作り変えることができると思ったのです。学生から、昔は「鬼の工藤」と呼ばれていましたが、いまは「仏の工藤」ということになっています。

◉お薦めの1冊
『魯迅全集』人民文学出版社
魯迅（著）
一言……「これは原書ですが翻訳本もたくさんでています」

◉お薦めの1冊
『劇場を世界に―外国語劇の歴史と挑戦』エディマン
谷川道子、柳原孝敦（編著）
一言……「外語大生なら必読必携の1冊！！」

◉お薦めの1冊
『言語―ことばの研究序説』岩波文庫
エドワード サピア（著）安藤貞雄（翻訳）
一言……「木坂千秋さんの訳（刀江書院）がベストです」

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉あたらしい広報誌の創刊にあたって、編集にかかわる全員が考えたのは、わたしたちの東京外国語大学が外から眺めたときに、いま、どんなふうに映っているのだろうかということだった。見えている（かもしれない）姿に、内側からの視線を重ね寄り添わせてみて、果たして新鮮な外語大像が浮かんでくるのかを確かめてみたかった。

これからは定期刊行物として、年に2回、変わりゆく外語大の魅力をお伝えする。（広報マネジメント室）▼

GLOBE Voice
グローブヴォイス
2010 Number1
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2010年3月発行
発行＝東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3・11・1
総務企画課広報係

編集＝広報マネジメント室
編集協力＝日経BP企画
印刷＝大日本印刷

アートディレクション＝犬飼健二
表紙撮影＝市橋織江
デザイン＝村山ハルカ（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2010
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。